



十二源氏袖巻  
六

第七函



源氏袖鏡第六

十二 ぬあをせ

十三 ねをせ

十四 うとをせ

十五 あさをか

十六 ををせ



源氏

十二 繪合

お糸おと文ふみとハ源氏



の中なかに



まのせまの糸末花後ハ世ノ下ア糸の  
時大こころんそつり進れり一まゆ糸一時乃  
ゆらりと御心志めてゆ又とあくゆらり  
よもうよほさたる人あつて口ゆくおゆり糸  
その目よたわそゆまうそくゆり一そいあひま  
り糸とくらのこいれらあま志ゆらぬん  
まゆらふらう一そくゆらぬらぬらぬ



ま中と和やふいりあ斎宮

ちんこしんぼくばりこくもふくわに  
ほととぎすもこつたひのこ梅つかたの世に門に  
よりのふはまらわたる後とこのまをぬかひり  
ゆきつこも二たぐむせまみ無支母師か  
けはふもぬかこひんもあつてまきくわこをぬ  
つねの中おといは中細きまのひ  
まめと今の世は十二のままもつりぬて  
ちんこしんぼくばりこくもふくわに  
ちんこしんぼくばりこくもふくわに

まあけくむあてうせりりゆきつた女  
師のうぬぬこちんこふいひぬて鈴と  
あおしそあわをせとせまをりはのまよ  
のまをりり女師ちんこふいひぬて  
こち梅つかたその世方平内侍の子けつはの  
内侍かたのまやぬちんこふいひぬて  
こよふ大威のまに乃ちけ中おのぬぬを  
のまをりぬかち源氏のたはもゆきつた  
つく梅つかたをりぬてかのまをぬて  
ひちんとちんこわてらるまよひ信を入らぬと



ふいの月記のたこと云はすありのうら  
つねあかりつけつそよしむらたの上よみせ  
まらふてとまてみせぬあをうみぬて  
ひしあぬくまみしむらあまのまむい  
ふそやうらふらうらら源成

うきやうしその中ありもたふ又さや  
うらうらまらうらあせぬ絵ものうらいせ  
物産竹らりのあされうつ那のうらけと代記  
よ字津係の物産廿一巻と記うらとみせ  
たの字津物産とらうて平内約



いせの海れもたれをこころすてうりし  
 作らるるやまのしきあけしりのあこころをほめ  
 心せ物終とりや一めてた乃大裁れたなり

お書のよき地おいのちわらふあふらちつら乃  
 えこもたらふおおしう入るのまもあおこころ  
 きるのしきほもあらんしてけりあふまよし  
 て中ら

みらあしうしうゆりあめうしあいせが  
 のあまれるあやまのめん繪もそらへらるる  
 ましうしうしうま程地しう梅つきのあかえ



いかにのちをいぢりたりあまき君

あつたまのまはらふとていぢりたりあまき君

聖中の名はゆとりんとてあまき君のまはらふと

あまき君のまはらふとていぢりたりあまき君

あまき君のまはらふとていぢりたりあまき君

あまき君のまはらふとていぢりたりあまき君

あまき君のまはらふとていぢりたりあまき君

あまき君のまはらふとていぢりたりあまき君

あまき君のまはらふとていぢりたりあまき君

あまき君のまはらふとていぢりたりあまき君

あまき君のまはらふとていぢりたりあまき君

あまき君のまはらふとていぢりたりあまき君

あまき君のまはらふとていぢりたりあまき君

あまき君のまはらふとていぢりたりあまき君

あまき君のまはらふとていぢりたりあまき君

あまき君のまはらふとていぢりたりあまき君

あまき君のまはらふとていぢりたりあまき君

あまき君のまはらふとていぢりたりあまき君

あまき君のまはらふとていぢりたりあまき君

あまき君のまはらふとていぢりたりあまき君

あまき君のまはらふとていぢりたりあまき君









おとけしきしてひめ君の乳母

音まねまよりのことよこひくもこの世に

おあしきめおいらとてあきくさじび雷をこしと

けて源氏まつしむるよありしり法車よあ

らるあまてしう君らうしうたてしうめり

かしのこゝろみしううしうてめるとを

車よのりおと神をとりてらくよめると

しうと源氏二葉のねよひさよとくれら

あしうれしきとらんおえもこの世にたき

おとあからうしうて源氏

おひうりしきもあけきいたたけらぬのね

おねのらよほまらん葉のさうしううし

おえしうとありしてあまのしあまもあつ

はりしうりおつと あまのしあまもあつ

ちとやうしうり あまのしあまもあつ

きぬくしうらあきれていふおらんとも

おとせいはたまたまつとすしうりても

おとわたりおとをいひくはさあはらう

て葉の上よはりしうしうあはね君あま

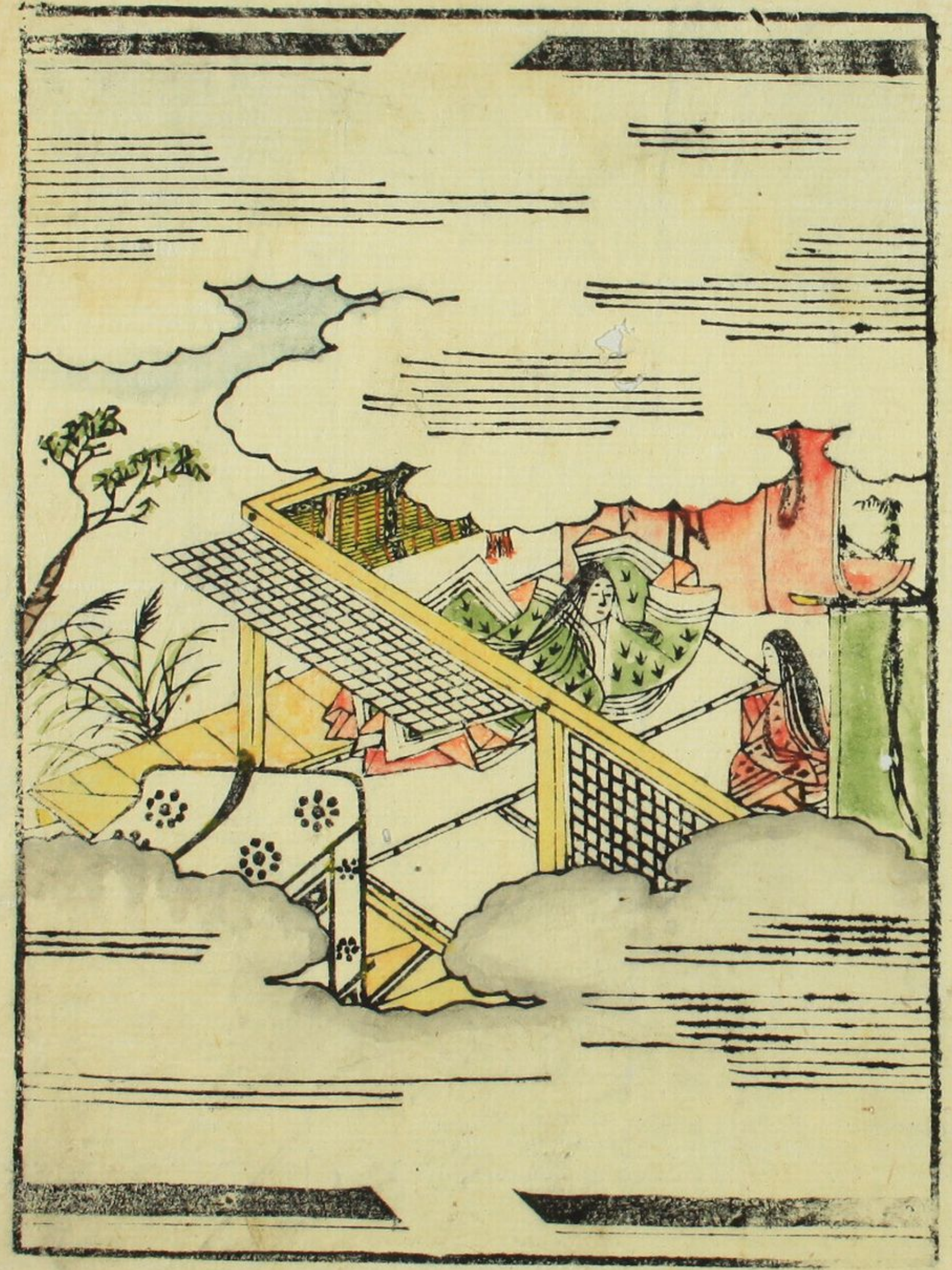
つとておととあまをさしてあまをみり

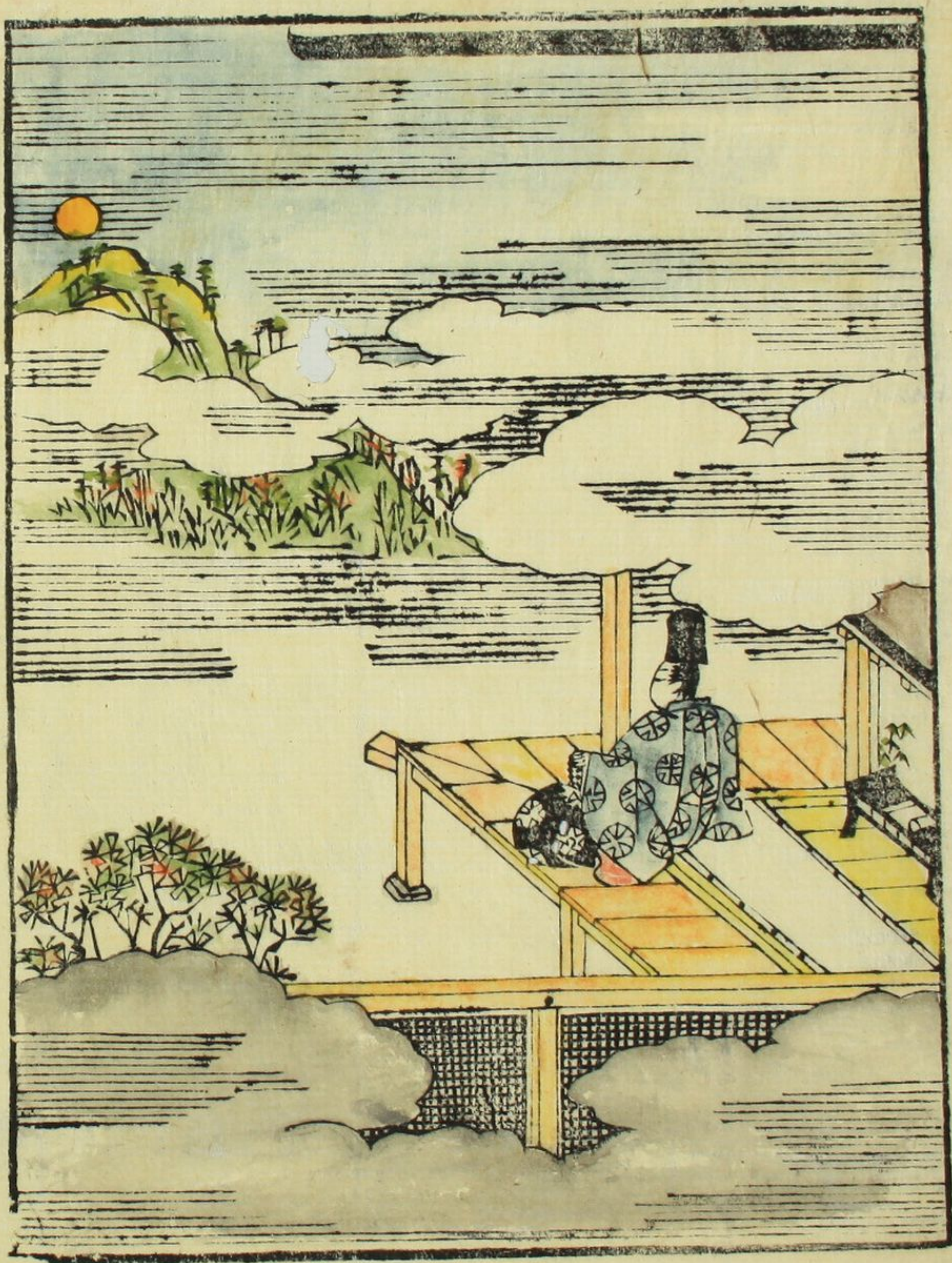




こと梅つやまゝのくすねはつては母をよも  
 秋ふれまひいよなるれくさこはのり一落れ  
 うとくも秋いそあられはゆきとちりひるま  
 のうまひるせいの源氏

君もさああゆむとわくせ人あれをわろか  
 ちげり秋乃やあ風けいそあゆま秋この山を  
 つげり大井はなまきかなゆきをにんこ  
 きりきりてあしけさ中いりかくり大の秋  
 かのうあくゆり水のたふらよみまういらいと  
 のゆきにうりまうゆきうらとてゆきのと





乃多る方は  
乃多る方は  
乃多る方は  
乃多る方は



十五 様

枕その式初<sup>め</sup>乃<sup>も</sup>あると云<sup>ふ</sup>皇<sup>上</sup>此<sup>の</sup>由<sup>を</sup>尋<sup>ね</sup>て  
源氏此<sup>の</sup>由<sup>を</sup>仰<sup>ぎ</sup>たりと此<sup>の</sup>由<sup>を</sup>尋<sup>ね</sup>て  
ひし<sup>の</sup>由<sup>を</sup>尋<sup>ね</sup>てと云<sup>ふ</sup>皇<sup>上</sup>此<sup>の</sup>由<sup>を</sup>尋<sup>ね</sup>て  
る<sup>の</sup>由<sup>を</sup>尋<sup>ね</sup>てと云<sup>ふ</sup>皇<sup>上</sup>此<sup>の</sup>由<sup>を</sup>尋<sup>ね</sup>て  
と云<sup>ふ</sup>皇<sup>上</sup>此<sup>の</sup>由<sup>を</sup>尋<sup>ね</sup>てと云<sup>ふ</sup>皇<sup>上</sup>此<sup>の</sup>由<sup>を</sup>尋<sup>ね</sup>て  
行<sup>は</sup>れ<sup>し</sup>由<sup>を</sup>尋<sup>ね</sup>てと云<sup>ふ</sup>皇<sup>上</sup>此<sup>の</sup>由<sup>を</sup>尋<sup>ね</sup>て  
の<sup>由</sup>を尋<sup>ね</sup>てと云<sup>ふ</sup>皇<sup>上</sup>此<sup>の</sup>由<sup>を</sup>尋<sup>ね</sup>て

人<sup>を</sup>尋<sup>ね</sup>てと云<sup>ふ</sup>皇<sup>上</sup>此<sup>の</sup>由<sup>を</sup>尋<sup>ね</sup>て  
了<sup>し</sup>と云<sup>ふ</sup>皇<sup>上</sup>此<sup>の</sup>由<sup>を</sup>尋<sup>ね</sup>て  
前<sup>に</sup>尋<sup>ね</sup>てと云<sup>ふ</sup>皇<sup>上</sup>此<sup>の</sup>由<sup>を</sup>尋<sup>ね</sup>て





さうしてあつた時、さうして人の心もさうさうなる  
花りけらのさうさうもさうさうなれども月  
と雲のさうさうあつたさうさうさうさうの  
さうさういせう外まをさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
源氏女もさうさうあつたさうさうさうさうさう  
てさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさ  
あつたさうさうさうさうさうさうさうさうさ  
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさ  
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさ

月影さうさうさうさうさうさうさうさう

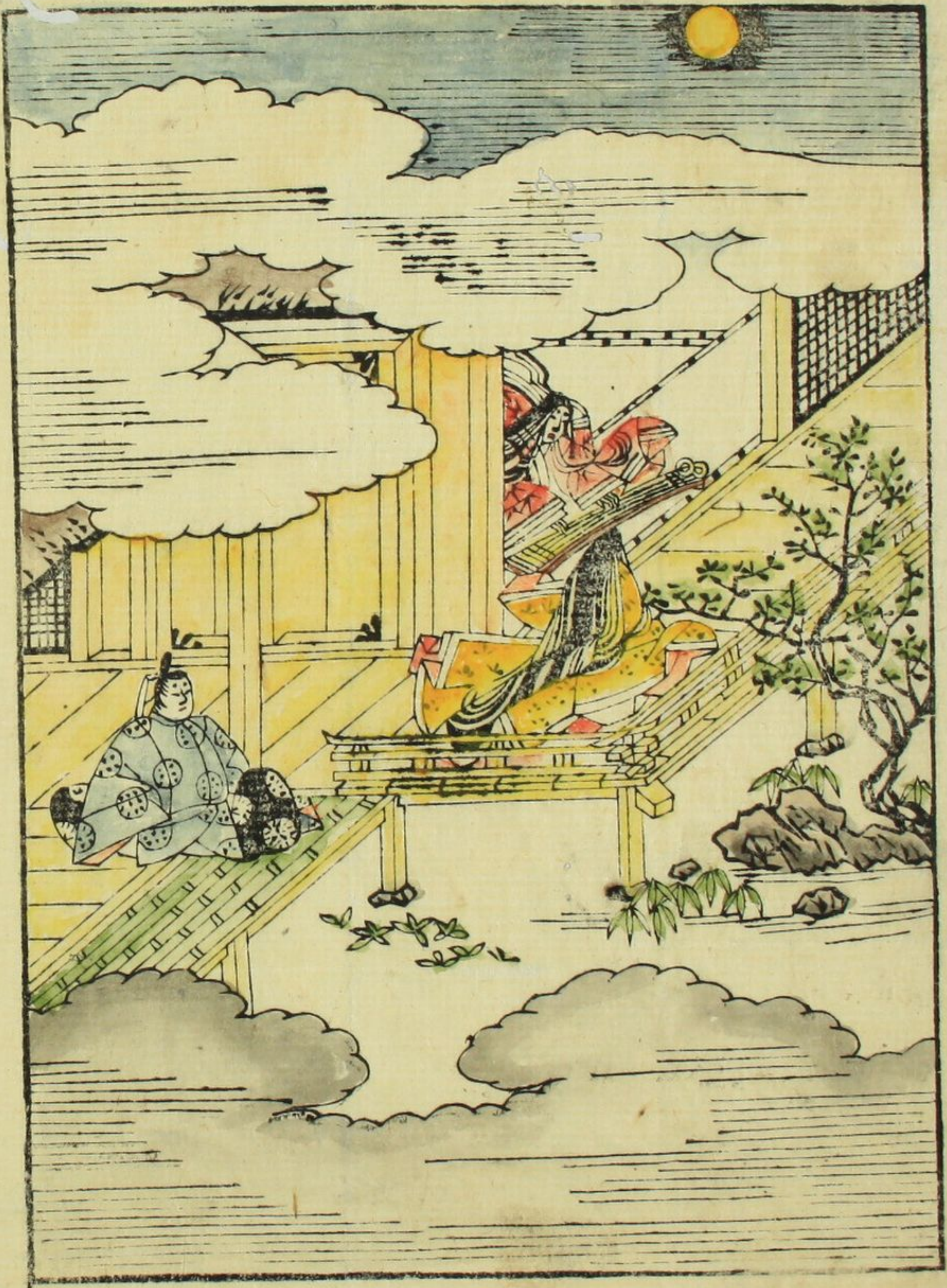
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさ  
月の影さうさうさうさうさうさうさうさうさ

さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさ  
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさ  
のさうさうさうさうさうさうさうさうさうさ  
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさ

さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさ  
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさ



あはれに  
かたじけなく  
あはれに  
あはれに  
あはれに



十六し女

年々あつてまらぬてまらぬてまらぬてまらぬてまらぬて  
あつてまらぬてまらぬてまらぬてまらぬてまらぬて  
まらぬてまらぬてまらぬてまらぬてまらぬてまらぬて  
あつてまらぬてまらぬてまらぬてまらぬてまらぬて  
あつてまらぬてまらぬてまらぬてまらぬてまらぬて  
あつてまらぬてまらぬてまらぬてまらぬてまらぬて

けさやハ川をの渡もさうなりあつてまらぬて  
のうらねやつとをまらぬてまらぬてまらぬてまらぬて  
あつてまらぬてまらぬてまらぬてまらぬてまらぬて







みちもつりていづれも

いづれもつりていづれも  
今中の夜をわけて又世にひあふるをうせ  
ぢりわかれさうりかひの若くはらんちんちんちんちんちんちん  
人よりくたせしむるはつらふもいよみんも  
らゆんたれはやくいづれも

若くはつりていづれもつりていづれも  
いづれもつりていづれもつりていづれも  
いづれもつりていづれもつりていづれも  
いづれもつりていづれもつりていづれも  
いづれもつりていづれもつりていづれも

甲子年とくつりていづれもつりていづれも  
大くつりていづれもつりていづれも  
ありきつりていづれもつりていづれも  
若くはつりていづれもつりていづれも  
いづれもつりていづれもつりていづれも

あめはつりていづれもつりていづれも  
いづれもつりていづれもつりていづれも  
いづれもつりていづれもつりていづれも  
いづれもつりていづれもつりていづれも  
いづれもつりていづれもつりていづれも



うらむをたてまいつくしきんじつとせむ

一花のけそめむら朱存院

九重霞霧つらるるもみりもきよとつむ

くろくろひそりく<sup>たけ</sup>晴のまじはしきし

告終まはれぬ

あしきよきつらきつらきつらきつら

あしきつらきつらきつら

うらむをたてまいつくしきんじつとせむ

うらむをたてまいつくしきんじつとせむ

うらむをたてまいつくしきんじつとせむ

うらむをたてまいつくしきんじつとせむ

うらむをたてまいつくしきんじつとせむ

うらむをたてまいつくしきんじつとせむ

うらむをたてまいつくしきんじつとせむ

うらむをたてまいつくしきんじつとせむ

うらむをたてまいつくしきんじつとせむ

うらむをたてまいつくしきんじつとせむ

うらむをたてまいつくしきんじつとせむ

うらむをたてまいつくしきんじつとせむ

うらむをたてまいつくしきんじつとせむ





Handwritten text in Arabic script, oriented vertically on the right page of an open manuscript. The text is written in black ink on aged, yellowish paper. The script is a cursive style, likely Maghrebi or similar. The text is arranged in four distinct vertical columns, reading from right to left. The first column on the far right contains approximately 12 lines of text. The second column contains about 10 lines. The third column contains about 8 lines. The fourth column on the far left contains about 6 lines. There are some faint markings and a small red stain above the text on the right page.

